

砂を噛む蟻

馬場 駿

川向この尾花が華やぐのは、太陽が西に傾き、逆光を受けたときだけだ。四六時中家に居て唾と一緒に愚痴を吐き続けている夫の、跳ね上がった髪の毛のような尾花の白が、急に輝いて綿毛よろしく膨らむ様は、私のしぼんだ心の中にも或る種の感動を呼び起した。太陽は圧倒的な光の束で手前の世界を耀(かがや)かせて、スキから先の全ての風景を黒くませ、曖昧に見せてくれている。あと二十分もすれば、幾重にも重なる山の彼方に沈む火の玉、それが私にだけ何かを伝えようとしている。そんな気がした。

急に瀬音が耳に蘇り、私は視線を川面に落とした。川底から私の立っている所まで計ったとしたら、優に背丈の四倍はあるだろう。目の前のガードレールが私の腿を支えていなければ、きっと真逆様に転落していたに違いない。それほど顔だけが対岸のススキに近付いていた。いつそ、その方が良かったと思いつつも、息を引き、慌てて後退りした自分が愛おしい。どうやらまだ、命が惜しいらしい。夫に命じられるまま、けばけばしい表紙の週刊誌を駅前の書店で買ってきた。そのポリ袋が、私の右手の震えをそのままに受けてザワザワと鳴った。

今度の住居は、川から五十メートルほど離れた、小高い岡の上にある古びた四階建てのコーポラスで、夫の定年後に渡り歩いた貸家式の中では、自然環境も間取りも良く、私も気に入っていた。不思議なのは、夫が、一階から三階まで、たくさんの空き部屋があったのに、最上階の四〇二号室を選んだことだ。夫には膝に水がたまると持病があり、さらには、数年前に心筋梗塞の手術歴まであるのだ。誰が考えても選ぶなら一階だろう。私も強行に反対をした。別に夫の健康だけを気遣ったわけではない。私自身、日に何回も建物四階分の階段を行き来するのはきついと

思つたからだ。

「毎日が監獄みたいなもんだ。せめて眺望くらい楽しみたいよな……」

怒鳴られたのなら別だが、弱々しくそう呟(つぶや)かれて私は、早々に抵抗するのをやめた。

確かに、不動産屋に案内されバルコニーから望んだ景色は、山あり川あり種々雑多な木々あり竹林ありで、心癒されるものがあつた。特に、山腹に這い上がった別荘群の遙か彼方の真つ青な空には、感動さえ覚えた。

人によつては、定年前の職種や地位にこだわらず、給与の多寡にも頓着しないで、惚け防止や健康維持のためにどんな仕事でもやるらしいのだが、夫は国家公務員として課長職まで務めたことを誇りにして、世間でいう天下りの仕事を二年消化した後は、職を探そうともせずに隠居暮しを決め込んでいる。人様は皮肉半分で「悠悠自適で羨ましいですね」と言つて微笑んでくれるが、家計一つとってもそれほど甘くはない。第一、普通なら貸家ではなく持ち家に住んでしかるべき履歴であり年齢だ。事実、詳しい経緯はまだに分からないのだが、夫が商品取引とやらで大損さえしなければ、自宅も退職金も無

事で、文字通り安気に暮せたに違いないのだ。

「鈴子、お釣りはすぐに抽斗に入れるよ、レシートといつしよにな」

息を切らしながら階段を登り、ようやく鉄製のドアを開けたとたんに、これだ。老いてはいても「男は男」のはず、何か卑小な感じがして、鳥肌がたつほどに嫌だ。つまらない用事を言いつけて小一時間も歩かせておいて、ねぎらいの言葉一つ掛けない。その思いやりの無さも哀しい。

『悪かつたな。僕が車で行けばいいんだが、膝の調子がいま一つで階段がきついんだ。ありがと』

創つた台詞でもいい。こんな一言でどれだけ救われた気持ちになるのか。

出会つた若い頃は違つた。どちらかと言えばきつぷのいい、心優しいタイプの男だつたような気がする。

「何か夕御飯で食べたいものありますか」
「二何年か、毎日のように夫に訊く。」

自分で夕食の物菜ぐらいあれこれ裁量できるのだが、そうすると必ずといつていいほど、おかずより先に不満の方を口にする。「こんな脂っこいもの、少しは歳を考えろ」とか、「手作りをさぼつてまた刺身か」とか、「たしかに稼

ぎは無くなったが、冷蔵庫の残り物は食わされたくないよな」とか、いろいろだ。

老いはこれほどまでに人の心を醜悪にするものか。そのたびに箸を置き、夫の無造作な顔をじつと見つめて、無言の抗議をする。

すると「何だその目は」とくる。

家庭という極小の世界で、過去の縦社会を引き摺ずり、無抵抗な古女房にしか威張れない。可哀相な男の典型だと思う。

「肉ジャガにしろよ、きょうは」

口の利き方まで粗野になった。

馬鈴薯はあるが豚肉も玉葱もない。また徒歩で、最寄りのスーパーマーケットまで往つて還ることになる。今度は一キロで四十分だ。

夫の白髪頭が寝癖で跳ね上っている。さつき見た尾花の耀きを想った。

『スキの方が何十倍も素敵』

机の前の夫の後姿が、雑誌のページをめくった。

さりげなく肩越しに覗いてみると、夫の濃くなった皺の指先で、半裸の若い女が微笑んでいた。

毎週木曜日の午後は黙つて夫の前から消えることにしている。帰宅した後で、どんなに責められようと思いきは言わない。

『新婚さんじゃあるまいし』

秘密をもたなければ心の健康が保てないのだ。世間という女でなくなった齡で、いまさら離婚もない。肉体の分離が完璧になったいま、精神的な完全分離が次の目標だ。家庭を老後の職場だと思えば、夫という上司の横暴にも耐えられる。この意味でも私には、『温かい家庭』が必要だった。

「あ、佳乃さん、また一番ですね」

この生涯教育の教室の樹洞(じゅどう)先生は、『生徒』を名前で呼ぶ。それが何とも新鮮で、嬉しい。佳乃は私の教室での名前。本名は家庭の臭いがして嫌だったのだ。

「すみません、また、五つは創れなかったんです。これで三回目ですよ、私つて俳句の才能ないものですから」

先生が端正な顔を崩して笑った。

「才能のある俳人は大自然だけです。人間はその、ほんの一部を盗み取るだけ」

才能があれば、誰でも入れる教室に通つては来ないだろう。先生の微笑は、それを言っている。

「その盗み方の指導を、きょうもよろしくお願いします」「はい、一緒に学びましょう」

生徒は総員七名。その全員が六十歳を超えている。地元の店主はいるものの、いわゆる勤め人は一人もない。寝起きの白髪頭そのまま出てくる男性もいれば、何を勘違いしているのか、毎度ドレスアップをしてブランド品のバッグを片手に登場する女性もいる。

そういえば先生も、いまだとき珍しいベレー帽姿だ。私も含めて、変わり者の倶楽部なのかもしれない。

『草刈りの創りし円に曼珠沙華』

過半数の四人のメンバーが、この句を好きな作品として選出してくれた。

自分の句が話題の中心になったときは、褒められるにしろ、くさされるにしろ、心が弾む。

『草刈り』という言葉は、一、草を刈っている人という捉え方と、二、草刈りという作業という捉え方と、三、その両方を掛けているという捉え方ができます。これはさつき何人かの方が、『創りし』があるから人に限定されると

おっしゃっていました。それは狭きに失します。一ならその人の心の優しさが出ますし、二なら巧まぬ偶然の妙が感じられますし、三なら作者の技巧を感じます。句を味わうということは、いくつもの解釈の可能性があることを学んだ上で、私ならこれを探りたいと選択する楽しみなのです。選ぶということの中に、自分の性格や感性や素養が表れます」と、一頻り感想が飛び交った後で、先生が総括をした。

先生は、生徒の作品を決してけなさない。私から見ても、これはちよつと問題という作品でも、必ず良いところを探し出そうとする。

『リンドウを震える缺で切り落とす』

作者を除き、この日集まった生徒全員が、この作品をただの散文だと非難がましく批評した。俳句ではないと言つたのだ。

先生は「なぜ缺はさみが震えたのかを、作者は言いたかつたのだ」と評し、『切り落とす』という強い詞（ことば）で、それでも切つた事情の解釈を読む人に求めていると、作者をかばつた。

私は毎回、女学生のように、この先生の一言に、一挙手

一投足に、胸をときめかせている。

『リンドウ』は、この作品を契機に、全員が季語を共通にする、この日の課題に急遽拔擢された。

「そんなに作者を責めるなら、皆さんも創ってみなさい」という先生の心が聞こえてきた。

私は、自分をリンドウに、先生を缺になぞらえて、心情を吐露してみたくなった。

『竜胆や缺の先でほの震え』

原作品とほとんど同じ言葉を使い、先生の目を惹きたかった。奏功したかどうかは分からない。

・・・分からないほうがいいと思った。

教室を出るとき、私が入会した日に最初に話しかけてくれた遼子さんがまた、「お茶しましょうよ」と誘ってき

た。会場だった市民会館から徒歩で数分のところにある、京川沿いの和風喫茶に入った。この川は我が家からも見下ろせる小舞川の支流にあたる。若い人たちの無遠慮なお喋りとは無縁の、落ち着いた空間が、そこにはあった。

いつも樹洞先生の側近くに席を占める彼女なので、先

生への想いでも打ち明けられるのかと思いきや、違った。

「わたし、今の主人と別れることにしたの」

のっけから私の密かな願望でもある離婚を口にしたので。

「いやだわ、冗談ばかり」と、大仰に反り返り、ソファに背を押し付けた私だが、好奇心だけは彼女の顔の前へと突き出した。

家庭内暴力か、積年の不満の爆発か、そんなところか
もと、告白の続きを待っていた私は、二度目の衝撃に遭
う。

「いい男ができたの。いまはやりの不倫なんだけど」

彼女は確か五十五歳と言っていた。夫君のことも何度か
聞いている。確か、五つ年下で高校の教師だ。「夫が女をつ
くった」というなら分かるが、女が愛人を作って離婚まで
考えている。

私はある種の感動を覚えた。

改めて目の前の遼子さんを見詰めてみる。

長い髪を一見無造作に束ねて後ろに巻き上げ、淡く
染め上げたその髪の毛を、額や耳のそばに自然な感じで
垂らしている。化粧は決して濃くはないのだが、シミもな

く、肌は十分に艶やかだ。瞳が少し潤んでいるのは視力が極端に弱いせいだと本人は言っているが、それさえ男性には魅力だろう。唇はぼつりとして、淡い朱色の口紅が濡れているように輝いている。撫で肩の下に隆起している胸はたぶん本物だ。

これなら十分恋ができる。いや、不倫をしている危うさや、新しい男性との心身の交渉が、いまの彼女をこの上なく耀かせているのかもしれない。

ただ、これでは『妻には男がいる』と、すでに夫君に感づかれているはずだ。

「無関心よ、十何年も前から」

危惧を伝えると、遼子さんは吐き棄てるように言った。私の夫は外出先を問い詰めてくるだけマシなのかもしれないと、一瞬思った。

「若い女生徒を毎日見ているから、私には欲情しないんですって。ふつう思っても言う？ そんな」と

それがセックスの意味なら実際にありうる。夫も二回様で、私が四十を超えてから現在まで、ただの一度も、誘いは無い。

彼女は、自分の放った言葉に反応して目に溜まった涙を、

明るい花柄のハンカチで拭った。

そのしぐさを私は可愛いと思った。耐えすぎて強くなつてしまった私、それはオスである夫にとつて興奮めな存在なのに違いない。四十を過ぎてすぐの頃だ。セックスを迫った私に夫は、冷ややかに持論を吐いた。

「女の肉欲は第一子の出産のときに、子どもとして体外に出すべきものだ。男にとつて経産婦はもう、欲情の対象じゃない」と。

まして四十を過ぎておや、と言いたげだった夫。事実それ以後現在まで、彼は主義を貫いている。

「ごめんなさい」と遼子さんは頭を下げて、「あなたにお話して、自分を強くしたかったの」と言った。

「ご主人に告白する前に、その彼に、結婚の意志の確認をしなくて平気なの？」

私は訊きかすにはいらなかった。先方も離婚する必要があるからだ。古い言い方になるが、閨房の睦言が頼りなら危険が伴う。

「それと、彼のお子さんの反対も覚悟しないと」

これでは、もうすっかり人生相談の回答者だ。反省する気持ちが一瞬だけだが、通り過ぎた。半ば嫉妬だ。

案の定、遼子さんは、キツと私を睨んで、目から鱗の台詞を口にした。

「本気じゃなくてこんな歳の女を抱ける？」

ずっと夫と一緒に布団で寝ていた。もちろん新婚当時から習慣でそうしていたのだが、夜中に夫が小用に立つ度に目が覚めてしまうので、安眠を確保するために、布団も、布団を敷く部屋も別にすることにした。寝不足は痴呆の到来を早めるというから、その意味でも遅きに失したかも知れない。

夫は一瞬怪訝(げげん)そうな顔をしたが、私が「風邪移すといけないから」と言うと、「そうか」と応えて傍らの本を読み出した。最近になつて凝りだしたミステリー小説だ。いずれにしても、文字通りの同床異夢、夫にとつても、ただの習慣だつたに違いない。

一人で床に就くと、遠い昔の独身時代を思い出した。ボーイフレンドというものに縁が無かつた私は、二十二を過ぎてても処女だつた。男性の体を具体的にイメージすることすらできなかった記憶がある。周期的にやってくる、体中が燃えるように熱い夜は、誰に教わるでもなく自分の

指を使つて、若いからだを慰めた。と、ここまで想いが来て突然、遼子さんが年下の男性と全裸で絡んでいる図が、頭の中に浮かび出た。ほんの少しだけ顔が火照つてきた。隣室の夫の躰を確かめ、二十二歳の夜の自分に戻るつもりで股間を広げた。小さな罪の意識の中で局部に触る。指が、一本も挿し込めない。不審に思い何度か試みるうちに惨めな気持ちに襲われ、涙が一気に溢れ出た。

たつた一人の男を知つただけで女を閉じてしまつた自分を求めることができないという寂しさ。人生そのものが終つたような気がした。

・・・遼子さんが心底ねたましかつた。

その日は、週に一、二度はある、行き先不明の夫の外出日だったので、洗濯に精を出した。私の衣類と夫のそれは当然分けて洗う。新婚当初は、夫の衣類に混ざつて自分の下着が泡の狭間に見え隠れするのを、鼻歌まじりに見ていたものだが、いまは男物が自分の洗濯物に重なつているだけで不愉快になる。

物干しのあるバルコニーに立つと、それを見計らつたよ

うに日が射してきた。見上げれば、近くの崖に根を下ろした広葉樹が、彩り鮮やかに、ゆつたりと構えている。名前はまだ知らない。時折、飛びなさい、と言わんばかりに大きく身を揺する。すると、数十枚の黄色が一斉に舞う。脇にある竹林の緑を背景に、ため息が出るほどの風情だ。雲が一つ一つの鱗の形を崩しながら頭の上に迫っている。自然が描く一幅の絵の下地は、抜けるような青。物干し竿を拭く手を止めたまま私は、胸一杯に秋を吸い込んだ。

『いわし雲千切れた想い青清し』

樹洞先生の云う大自然から盗むことができたかどうかは不明だ。

自分の命があと何年もしないうちに終る。その想いが日々強くなる。その大事な時を、身も心も離れた夫との砂を噛むような暮しで削っている。それが分かっているが何もできない私が、洗濯物を干している。

女子大の文学部を卒業してすぐに、友人の紹介で付き合っていた田名部と挙式。以後、一度も就職せずに来てしまった。言ってみれば、夫の「御羹(おさんどん)」と息子良一の出産と育児、一生をかけてやった仕事はそれだけ

だ。そこには肝腎な私自身がいない。

「私が私になれる何かがしたい」

経済力の無い身では叶わないと知りながらも、自分の中で、今もその想いを大事に育んでいる。

十年ぶりに私たち夫婦のキューピッドである愛子から手紙が来た。封筒の底をトントンとテーブルの上で弾ませ、便箋を傷つけないようにして、缺で封を切る。

『ご無沙汰をしていますがお二人ともお元気で、仲良く暮らしているらしいと思います。白髪が混ざった頭を並べて、手なんか繋いで、ニヨニヨしながらお散歩をしている姿が目に見えます。』

わたし、いま封筒に書いた住所に居ます。驚いたでしょう、鈴子が想像もできないような、極め付きの田舎です。村がその存続をかけた計画、『高齢者夫婦の誘致』にのって主人と二人、のこの来てしまいました。だからこれ、一年遅れの転居通知です。もともと早く報せようと思ったのですが、僻地の生活が耐えられなかったときに恥ずかしい思いをするので、様子を見ました。

こちらに来てすぐに廃屋に近い二十坪の家と、二反

(六百坪)の畑地を無償貸与され、その両方の手入れに村中の人が応援してくれたのには驚きました。都会ではまったく考えられないことですものね。

慣れないうちは、昼間の不便さと夜の恐さで、毎日「東京へ帰りましょうよ」と騒いで、主人を困らせていたわたしですが、今では山野の景色に溶け込み、野草や野鳥の知識も増えて、主人よりもずっと、田舎を楽しんでいます。鈴子も一度、遊びに来ませんか。一人になることは、二人のときを遠くから見詰めること。何かの本に書いてありました。その気になったらいつでもお便りください。

くれぐれも健康には気をつけて。田名部さんにもよろしくお伝えください。愛子』

彼女に田名部を紹介された当初、周囲には、愛子と田名部が出来ているという噂があった。私はそれを知りながら、怖気づいたり軽蔑したりすることなく、戦い取りたいと思ったものだ。現実には挙式に持ち込んだときには、自分のアパートで「勝った」と、一人祝杯すらあげている。その後彼女は、定職にも就けない貧乏詩人と結婚をした。中央官庁に就職していた田名部とは天と地の差が

ある男だった。

それがどうだろう。老境に入つてまで、二人は信頼し合い、僻地で日々援け合い、いまでも「恋愛」をしている。仲睦まじい二人の写真が同封されているわけではないが、文面がそれを映し出している。

『愛子はまだ』主人に抱かれて眠るのかしら』

私は、便箋を羨望と一緒に折りたたんで、封筒に戻した。ため息が漏れた。

夫にも読む権利がありそうにも思えて、手紙を夫専用の状差しに入れた。

女文字・・・いや、英字も見えた・・・

心が留まつた。差し込む瞬間に見えた葉書の表書き。恐る恐る愛子の封書と一緒にそれを引き出す。パソコン印刷用の葉書の裏は、愛くるしい笑顔の外国の少女。アジア人だと思いが、どう見ても未成年だ。文章は皆無。どうやら写真を送るのが目的の全てらしい。ということとは、夫が依頼しているということか。表の宛名に小さな会員番号らしきものが付されている。差出人は『蒼い果実企画』。不思議なことに切手が貼られていない。もしかしたら、もともと封筒の中に入っていたのかもしれない。

少女の名は、乱暴な英字サインながらシンディと判読できた。

『田名部が少女買春？ まさか』

毎度買に行かされる低俗な週刊誌のグラビア写真が脳裏をかすめた。

私は眩暈がして床にへたり込んだ。夫はもともと理解しにくい人なのだが、それにしても、日頃ちまちまと小銭をケチる目的が買春では、同居人としても心底やりきれない。

気を取り直して老眼鏡を探し、葉書に書かれた電話番号を一つ一つプッシュする。『確認しなくては』という気持ちだが、躊躇いに勝つたのだ。

呼び出し音よりも自分の心音の方が大きい。急に音が変わった。転送されたのだろうか。なかなか出ない。電話を切ろうとする思いが強くなった、そのときを捉えるように、相手が出た。

「Hello Tanabe, This is Sindy speaking.」

耳から遠ざけた受話器の向こうで、また何か喋っている可愛い声の女……。取次ぎ無しで、直につながったことになる。

「もう嫌いや」

私は何度も何度も首を振った。

学生時代に何の抵抗も無く暮らしていた東京という化け物に近い巨大都市。それが今は、駅の雑踏の中に身を置いただけで、息苦しくて額に脂汗が滲む。あの頃は、どんなに地下街が混んでいても、他の歩行者の進行を妨げたり、真正面からぶつかったりすることはなかった。それがいまは、人の流れが全く掴めない。右に左に身を躲(かわ)して衝突を未然に防ぐことができない。「ごめんなさい」を連発して頭を下げる。立ち止まる相手はいない。その度に違う人に謝っていることになる。それもまた、目の前の歩行者の邪魔ではない。私はようやくやく自分が、すでに『役立たずの老人』になつていふこと思い知らされた。目当ての如何わしい事務所は、裏通りの、くすんだ五階建てのビルの最上階にあった。こここそ営業しているのかと思っていたが、入り口のドアには立派な文字で社名が掲げられていた。有限とか株式とか会社の種類が記されていないのは、当然なのだろう。

「いい年をして、あんた、いやさ田名部さんの奥さん、男

の生理も知らねえのかい」

一通り私の訴えを聞いた後で、机の上に両足をのせると四十がらみの男は、凄むように目を剥いた。同時に男が反り返ったので椅子も大きくギシツと鳴いた。

「こっちはただ、旦那さんの下半身のお世話をしただけだよ、いわば介護だ。問いただしたり恨み言を吐いたりする相手が違うんじゃないの」

「いえ私はただ事実を知りたくて」

「知ってどうするんだい、奥さん。いきり立ってここに駆け込んでくる女は、みんなそうだ。もう夫の欲望にも気持ちにも無関心、その上女としての機能も失って、それでも不潔だとか、世間体が悪いとか、人間として最低だとか責め立てる。どうせ腹の中じゃ、そんな金があつたら私に、つてことなんだ。汚いのはどっちなんだかな。違うか？自分の胸に聞いてみなよ」

口惜しいけれど、胸に刺さるものがあつた。ただ、何でもこんな男に言われなければならぬのか。

「そうだとすよ、相手の方はまだ未成年ですよ、ね、していることは売春ですし、人の道に外れていることは確かですよ」

口にするだけで動悸が激しくなつた。

男は、事務机から足を下ろすと、近くのティッシュペーパーを取り、大きな音を立てて涙をかんだ。

「まあ聞きなよ。うちの女の子はみんな、国に帰れば亭主がいる。子どももいる。日本だつて婚姻が成立すりゃあ成人扱いするはずだ、法律もね。けなげじゃないか、日本で稼いで本国へ送金して、亭主を含めた扶養家族を支えているんだ。俺たちはねえ、何んにも強制していない、女の子とその家族が生きていかれるように、言わばお手伝いしてるだけ。このどろろが人の道に外れてるんだ？ 自発的だから一生懸命尽くす。ただ一緒に暮らして愚痴と文句しか口にしない奥さん連中とは雲泥の差だよ。そうそう、いま、売春と言つたのは取り消してもらおうか。うちの子と田名部さんは、いわば自由恋愛だ。逆な言い方をすれば、いつ別れようが自由で、こっちは全然関与しない。口惜しかつたら自分で二人を引き離してみたら？ 旦那さんはシンデイが好きだから金を渡す、けつこう半端じゃない金だが、請求されたからじゃない。こっちはいろいろ経費が掛かっているから、計算して女の子に、ここが大事なとこだ、女の子に、請求をする、ご主人にじや

ない」

頭と心が混乱してきた。とくに「恋愛」ということばが麻酔薬のように全身に回ってくる。六十をとうに過ぎた男と二十歳前の、それも外国の女の子との肉体関係なのだ。

「分かったらさっさと帰りなよ、こんなボロ事務所でも結構仕事、あるんでね。奥さん！」

この男の「奥さん」には強い揶揄(やゆ)を感じる。

私ほうなだれて、出口に向つてとぼとぼと歩を進める意外なかつた。男との論争に負けたのではなく、シンデイという女の子に負けたからだ。確かに私は今の田名部に何もしてやれていない。それはその通りだと思つた。

「奥さん、ご主人のお尻拭けるかい？ 若いときのご主人じゃなくて、今のご主人の。小便した後のチンチンの先、拭けるかい。ご主人がかいた全身の汗、拭いてやれるかい。男の精液も血や汗と同じ体液だ。それなりの役目がある。たまつたご主人の精液を出してやる努力、少しはしてんのかい」

後ろから来る男のからかい半分の言葉の一つ一つが、私の心身を突き刺した。

『そんなことしていないし、私にはできない』

私はやつとの想いで振り向き、私を送り出すかたちで立っている男を見上げた。

「ご主人はシンデイが若い女だからつただけで、セックスがうまいっただけで、あれだけのお金を渡しているとは思えないけどね。商売柄そちのプレイだけつて男、ごまんと見てるけどね。ま、余計なことだな、これも」

「……いつたいいくら払っているんですか」

男は、私の問いには応えず、鼻先で笑つて言った。

「さっきの、答えがノーなら、将来奥さんは田名部さんの介護はしないね、保証してもいい」

飛躍しすぎた論理だと思ふ。自分の行いを棚に上げた、盗人猛々しい態度だと思ふ。それでも私は、納得しそうになる自分を抑えきれず、反駁する言葉一つ、発する。こゝとができなかつた。

ビルの外は、光と音の洪水だった。私の臉は見えるものの全てを拒むようにして目を閉じた。耳も、中で聞いてきた声の再生を予防すべく、また、自分の中の全ての雑音をマスキングするように、自ら高周波音を発し出した。

「なぜこんなところまで来たのだらう」

口だけが小さく開いた。

東京から自宅に戻っても私は、夫に別れ話を切り出せずにはいた。

いまの夫には、財産分与や慰籍料請求に応える資力が無い。商品取引とやらで全て失っている。夫に入る年金の類が家庭の収入の全てなのだ。

それなのになぜ、外国の女にその大事な金をと、また新たな怒りがこみ上げた。

離婚の請求をすれば、夫にとつては、一人分の食い扶持が減るのだから、もっけの幸いだらう。一方の私は、無職無収入で住処を失い、文字通り乞食のような生活に突入してしまう。たとえ戦つて、夫の年金を応分もらえようにしたとしても、借家生活は不可能に決まっている。息子夫婦も、特に嫁の安子は私を、絶対に引き取つたりはしない。それは聞かずもがなのことだ。

『夫婦つて何……家族つて、何?』
半世紀を費やして得たものは、あまりにも惨めな現実だった。

コーポラスの一室という小さな空間で、同じ空気を吸

っているだけでも吐きそうになる夫の存在。室内ですれ違い、着衣が触れ合っただけで鳥肌が立った。

それでも、布団の上げ下げ、洗濯、掃除、買い物、風呂の準備、それに三度の食事は繰り返される。この日常性というのは感情や感性を鈍磨させる働きがあるらしい。一日も耐えられないと思いつつも、なんとか一週間を過ごしている。

「鈴子、お前、何を企んでるんだ」

朝七時の食事の際に夫が言った。

さすがに、鈍感な彼も私の異状に気づいたらしい。使った言葉が、そのまま攻撃になっている。

「べつに……ちよつと風邪かもしれせん」

「正直な奴だ。たまには風邪以外の理由を探せ、バカ」

夫が目やにを付けた目で睨んだ。

いつそ怒りのままに大声で罵つてしまおうかとも思う。或いは、言葉を選び、理詰めで夫の退路を絶つように攻め続けようか……。しかし、どういう出方をしようかと、シンデイのことに触れたとたん、私も夫も一瀉千里に離婚に向かつて突き進むに違いない。それを思うと決断がつかない。愛情はもう一欠けらも無い。世間体も気にし

ない。息子への遠慮も既に無い。あるのは、離婚後の生活に対する不安だけだ。つまり金だけだ。それが、二重の意味で哀しかった。

「女の涙と犬のビッコは信じるなだ。お前もなかなかの役者じゃないか」

うつかり、目に溜めた涙を落としたら、これ以上はないという、凍て付くような言葉を夫は吐いた。

「お味噌汁がさめますよ」
やつとこのことで、言葉を返した。

「今の俺たちに比べれば、まだましだよ。言いたいことがあるなら、さつさと言え。こんなチャンスはそう無いぞ。お互いに、これからは外出が増えるだろうからな」

夫の口許が、意味ありげに笑った。

夫は私が『蒼い果実企画』を訪ねたことを、あの男からの連絡か何かで既に知っている。だから憤怒で煮えたぎっているのだ。それはもう、確信に近い。

「ごちそうさま」と私は、視線を逸らしながら立ち上がった。これで、離婚は決まった。問題は、そのプロセスと、その後の身の処し方だ。そう思った。

スーツと血の気が失せて、膝から崩れ落ちた。

「バカヤロウ、そこまで演技する気か！」

うなだれて床を見詰める私の頭に、生暖かい液体がかけられた。

『このお味噌の香りは絶対忘れない』

目の前にある流しの下の扉……開ければ庖丁がある。

私は、その俄かな殺意と扉の二つの取手を、同時に左手で押さえ込んだ。立ち上がりながら振り返ると、夫が机に向かおうとしてこちらに背を向けている。

「いまなら」とけしかけるもう一人の私があった。

ことのあらましを樹洞先生に話すと先生は、小さく唸つたあとで、濃茶の碗をゆつくりと手にした。

「先生、ご相談が」と言つた後で、私はその概略も口にできず、ただ先生の、下膨れで、優しそうな顔をじつと見詰め続けた。先生の左の顎に剃り残しの白い髭が一本、ゆらゆらと遊んでいる。

「この近くに、遊行寺というお寺がありましてね。その境内の端に茶処があるんです。行きませんか、とっても善哉が美味しいんです」

生徒が帰つたあとの会館の一室で、やつと捜し物を見つ

けたというように先生は、急に表情を和らげた。

雲の白が一面の秋空の下、茶処を目指して境内の小径を二人して歩く。萩の小枝の群れがそんなくつつ付くと言わんばかりに、二人の間にしばしば割り込んでくる。先生に遅れまいとして、満開の花を掻き分ける私。

「竜胆や缺の先でほの震え」と先生が、急に立ち止まって振り向いた。

二人の距離が一気に縮んだ。感情に激して先生に抱きつこうとする私を、白い邪魔者が制止する。

「あなたは強すぎると思います」

「いえ先生、わたしは何の力も無い、駄目な女です、弱い人間です」と、私は台詞を読むような口調で言った。

熱い頬に風が当たると感じた。

「あなたは缺、あの句を詠んだとき、僕はあなたの鋭い刃の先で、ほの震える自分を感じた」

やはりあの句は先生の目に留まった。それは嬉しいのだが句の意味が、句に託した心が伝わっていない。それが悲しかった。

「わたしが感じた震えは恐怖です」

『わたしは缺ではなくて、竜胆です』と言おうとする私を、

この言葉が止めた。

「恐怖、ですか……」と、声音までが変わった。

近づいたと感じたのは錯覚だった。

「ええ、周りを見ない。自分の目を周りの目に代えて自分を見ない。その狭さが、あなたの強さだと思います。もちろん括弧の中に閉じ込めたい『強さ』ですが、その強さが相手を恐怖に陥れる」

静かに濃茶を啜(すす)る先生は、きつと、いまこのときも、私を恐怖しているのだろう。夫の田名部を三十分もかけて詰り倒したこの私を。

「さっきの萩の小径ね、なぜ僕が選んだか分かりますか」

私は目を瞬かせた。

『選んだ……』

先生は微笑して「萩を愛でて一句捻ってみる、そんな余裕はありませんでしたか」と、私の顔を覗き込んだ。

「すみません、文芸どころではなくて」

生活が、今後の人生がかかっているのだ。

「文芸つてね、いまの、あなたのようにときに役に立つんですよ、そうは思えないでしょうけど」

もつと実になる話を聞きたい。正直なところ、そう思っ

た。

「見返らぬ人にも尽くせ零れ萩」

樹洞先生が、茶飲み茶碗を覗き込みながら続けた。

「駄作ですがいまのあなたに贈ります。さつき振り返ったときね、あなたの後ろにたくさん、萩の花びらが落ちていたんです。こぼれ梅、こぼれ桜があるのだからこぼれ萩もいいでしょう？ あなたは句に何かを託せる人です。この句の中の『人』があなたなのか、『零れ萩』があなたなのか、それはあなたが感じればいいこと。いえ、あなたが決めればいいこと」

「見返らぬ人にも尽くせこぼれ萩……」と私は声に出して反復した。この句が何だというのか。

籐製のテーブルの上に木漏れ日が輝いた。厚い板ガラスが俄かに陽光を反射させたのだ。

「晴れ上がった感じですね」と立ち上がる先生。帰りましようという意味らしい。

「あの」と私は縋るような目で見上げた。

「何かアドバイスをいただけませんか」

「佳乃さん、あなたは思いつめて、一気に、ご自分がこうしたいということを私に告げましたよ。僕は聞くことで

役割を果たしました。助言は言わずもがなでしょう。唯一贈れる言葉は、拙い句にしました。文芸の良いところは、

佳乃さん、自分の目で人やものごとを見詰めるながら、第三者の目で、その見つけている自分自身を観察できる、というところにあるんです。お宅に帰る道すがら、一句創つてみてください。これが私のアドバイスといえば、アドバイス」

私は礼の言葉を発することも出来ず、立つて、ただ深々と頭を下げた。

『何にも得られなかった』

レジで支払いをしている先生の後姿を見ながら、また惨めな想いに囚われた。

「来るなら来るで、一週間前に電話しなよ、俺、営業なんだし、こう見えても一応係長なんだからさあ、ウィークデイにプライベートで欠勤なんて許されなんだよ、一回も外で働いたことのないあんたにや分らないだろうけど」

三年ぶりで訪ねた私を玄関から居間に招き入れる間、息子の良一は、ずっと愚痴を言い続けた。

「お前、父さんにそっくりだね、その言い回し」

「やめてくれよ、俺、あんなに腐つてねえよ。ま、長年官僚なんてやってると、みんな同じになつちやうんだらうけど、ところで電話の話、俺も安子も反対だから」

まくし立てながらも、一応座布団は敷いてくれた息子。これだけ騒いでも顔を出さないところをみると、嫁はどこかへ買い物にでも行ったのだらう。気を利かしたのではなく、きつと逃げたのだ。そう思った。

「間違つても転がり込んだりはしないよ」

「ああ、頼むよ。ローン抱えてカツカツの暮らしなんだから、子どももつくれないうけよ」

子どもが何の役に立つ。目の前のお前を見れば分る、と口走りそうになつた。鋭い目つきになつていたのでらう。息子が、肥えた身体を揺すつて言った。

「一万ぐらいなら貸せるよ」

「ちようだい。きょうも父さんの引き出しから一万円掠めて、やつと二日まで来たんだから」

良一は、立ち上がると近くの筆筒(たんす)から一枚の札を取り出して、立つたまま私に差し出した。

現金を手渡すときは、自分の目の位置を相手の目の処

まで下げないと見下したかたちになり、失礼になると何度も躰たはずなのだが、無駄だったらしい。

「お前だから聞くけど、あの歳になつても女の子とできるの？ ものの役に立つの？」と私は、唐突に聞いた。

「三十五の俺に聞くなよ。でも、できるんじゃないの、人にもよるけど。現にうちの会社でも、出会い系で若い子、金で買つてる爺さん何人もいるらしいよ。もつともこの手の話、尾鰭(おひれ)がついて面白おかしく伝わるから、ま、いい加減な情報だけ」

一般論ではない。現実の、田名部の話なのだ。

「親父、もしかしたら、いや……」と息子が口籠もつた。

「何か知つているの、お前」

「別に。ただ昨日あんたからの電話受けた後でさ、親父の歳に自分を置き換えてみて、動機みたいなものを推測してみたんだ」

私は思わず身を乗り出した。

「癌か何かであと少ししか生きられない。そうならたら俺もいまの親父みたいなこと、するかも」

癌……思いもよらない言葉が出た。まさか、と思う。

「心筋梗塞なら分かるけど」

「どつちでもいいよ、要は、間近に迫った死を意識しているんじゃないかと、言いたいわけ俺は」

死を意識したのなら、自分の死後の身内の生活を心配してほしい。それなのに、金で若い女を買って快楽に耽る。その発想が分からない。終わりよければ全てよしと言うではないか。それを、ことさら晩節を汚している夫が情けなかった。

「もういいよ。そうやって親父の悪口言ってるあんたの顔、けつこう醜いよ」

抑制が利かなくなつてまた田名部批判を始めた私に、息子の鉄槌が下った。

「やつぱり男同士よね」と、やつと反撃をした私。

「そうじゃなくてさあ、昨日からずっと聞いてると、あんたは完璧、親父は人間の屑つてことになるよね」

「え?」と、私の思考が立ち往生をした。

「でも、違うだろ。あんた、親父にとつていい女だったのかな、いい女房だったのかな、一度、その『はてな』にあんた自身が戻らないと、この結末は悲惨になるよ、きつと」

私の中では、いたらないドラ息子だった良一。逆立ちしても私が好きになれそうもない女と結婚して、一気に私

から離れた冷たい息子。それがいま、大人の口をきいてい

る。
『樹洞先生も良一と同じことを』言いたかつたのかと、ふと思つた。もしそうなら、「けつこう醜い顔」を先生にも見せ続けたことになる。

『恥かしくて、もう句会に顔を出せないかも』
そんな思いが胸をよぎつた。

「良一、お前も母さんのこと、嫌だと思ってるの? 女として、人間としてでもいい、とにかく良くない性格だつて、最低だつて思ってるの?」

「それでもないさ。そこまで卑屈になるなよ」

「そう言う息子の目許が小さく痙攣したのを、私は見逃さなかつた。」

「本当のことを言つて。母さん、必死なの!」

息子は大きく肩を動かして溜息をついた。

「じゃあ、言つてやるよ。あんた、お前さえ産まなければ離婚できたのにつて、俺に何度言つたと思つて。いい女で、いい人で、いい母親だと思つてたら、実の母親をあんた呼ばわりしやしないよ!」

言い終わった息子の顔が、しばらくの間、小刻みに震え

ていた。

小舞川の左側が半ば枯れた葦で輝いて見える。その黄色の塊が途切れる場所に大小の石が連なり、見ていると尾を振る野鳥が現れては消え、飛び立つては同じ位置に戻ってくる。きつと葦に隠れて巢があるのだろう。川の水量は渇水期なので少ない。その分澄んでいて、ときどき、名前は知らないが、魚の影がすばやく動く。きらきら輝く川面の光は、半ば傾いた陽の自己主張だ。下ばかり見ているので空を見上げてみる、とでも言うのだろう。確かに目を細めれば、目映い不定形の光の中に、真ん丸い太陽の本体が現れる。

私は、橋の上に佇んで、穏やかな自然を味わっていた。

『お便り、主人が留守の時間にじっくりと拝見しました。

鈴子の悩みの一つ一つに何かを言えるほど、わたしは偉くはありませんし、解決策を出せる知恵もありません……哀しいことだけれど』

私は、田名部にも、風俗業者にも、樹洞先生にも、そして息子にも呆れられるような女に成り下がっていた。しかも二丁寧に、長い間、その事実にもまったく気づいていな

かった。今回の件で私自身が一番傷ついたのはこのことだった。愛子に教わろう、私のどこが駄目なのかを。そう思いつめてしたためた手紙だった。

その返信を心の中で反芻している。

『……ただわたしが無思慮だったのは、鈴子が彼に不審を抱いたときに、それを彼自身にぶつけず、まるで探偵のように、周りから調べたり確かめたりしたことです。彼のことを彼以外の男性に向かつて罵ったことです。聡明な鈴子にしては迂闊だったと、はつきり言わせてください。茶の間で彼が、鈴子の頭にお味噌汁をかけたこと、それ自体は許されないことです。でも、彼がそこまでの怒りを鈴子に感じた理由の一つは、このことだと言えるでしょう。それをしてしまつては、二人の間が修復したあとでも、外部にその傷痕が残つてしまいます。とくに、男性の彼は、

社会的な、世間的な評価という点で、抹殺されたようなものです。その斡旋業者の罪は別として、もし田名部さんが、何らかの事情でその外国の女性を心から援助していて、それが人道的にも素晴らしいことだったとしたら、鈴子は彼に、どう謝れるというのでしょうか。いえ、彼の目的がセックスかどうかはつきりと判るまで、他の誰が何と

言おうと思おうと、彼のことを信じてあげる。それが長年連れ添ってきた夫婦というものではないでしょうか。

第一子を生んだ女はもうセックスの対象ではないと、彼が言ったとしても、それは彼独特の言い回しで、はつきり言えば男としての見栄です。鈴子はその言葉を鵜呑みにして、セックスを基本においた夫婦生活を営もうとしなかったのではないですか。これは少し考えればすぐに気がつくことです。彼は国家公務員で、しかも男性としてまだまだ欲望の盛んな時期に管理職についていますよね。そういう彼が、妻以外の女性と頻繁に性的な交渉をもつわけが無いのです。職を、地位を失うリスクを背負うからです。彼はああ見えてナーバスなところがあります。小心な面も併せ持っています。威張ったり、カッコをつける言動するのはその反動でしょう。それも判つてあげて欲しかった。鈴子ならきつと出来たはずだから。これは想像ですが、彼は、鈴子を求めることができずに長い間ずっと、悶々とした夜を重ねたと思います、まるで戒律の厳しい僧侶のように、性の欲望と戦いながら。

今回、もし鈴子の言うとおりの行状だとしたら、良一さんの推測は確度が高いのではないのでしょうか。彼はきつ

と、溜まった欲望を抑えておく理由の全てを失つて、きつと解放されてしまったのだと思います。そうでないことを、つまり彼が健康であることを、祈りますが。

鈴子の真摯な相談に、こんな返事しか書けないことを、情けなく思います。願わくばですが、一度でいいから、彼と真正面から向き合つて、話し合つてください。これがお二人を知るわたしの、祈りにも似た気持ちです。

もし嫌でなかつたら、そして、もし私がお役に立てるようなら、そちらに行くこともできます。主人もきつと、許してくれると思いますから。

鈴子、勇気を出してください。愛子』

「愛子、やつぱりあなたと田名部は愛し合っていたのね」
私は自分でも意外なほど、その事実を穏やかな気持ちで認めることができた。愛子には所詮敵（かな）わないと思つたのだ。田名部との結婚が決まったとき、「勝つた」と祝杯を挙げた私は、何とも滑稽だったことになる。

愛子に私たち夫婦の仲裁に来てもらうわけにはいかない。それをしたら、私よりも夫の田名部が惨めだろう。まだ愛子のことを密かに想っているかもしれないのに。

『あ、また出てきた』

野鳥は気候が穏やかな間には単作りをせず、草木が冬仕度をする頃からがそのシーズンだと聞いた。天敵が皆冬眠に入るからなのだろうか。

また石の上で、鶺鴒のような鳥がダンスをしている。ずっとこの辺りに棲息していたはずなのに、初めて見た。名前を知りたいと思った。

『おーい、こっちおいで』と手招きを試みる。

樹洞先生が私に勧める一句はまだ出てこない。

それでも先生の講義は思いました。作品の長所を見つけること。作者が何を言いたかったのかを捜すこと。作品には複数の解釈の可能性があることを知り、そのどれを選ぶかは、その人の性格、感性、素養などに係っていること……田名部の行状を「作品」と捉えれば、先生の話はそのまま応用できる。私のとった言動は、全てこの内容に反していた。それを、先生や良一や愛子が教えてくれたことになる。私だけが「文芸の人」ではなかった。品性が卑しかった。そうなる。

「見返らぬ人にも尽くせ零れ萩、か……」

少し肌寒さを感じて、後を振り返ると、太陽はいつの間にか、山の向こうに沈もうとしていた。

一体どれだけの時間、橋の上に居たのか。

五十メートル先にあるコーポラスが、とてつもなく遠く感じられる。

『きょうも帰るしかないわね』

……また急に瀬音が高くなった。

とりあえず耳が、正常に戻ったらしい。